

近代朝鮮における海藻の生産と流通——日朝を結ぶテングサとフノリ

石川亮太（立命館大学）
iskw74@gmail.com

はじめに

- ・近代の三重／海藻／朝鮮半島
- ・近代の日朝関係について海藻を通じて考える テングサとフノリに注目（資料 1）
- ・先行研究の状況（末尾の文献リスト参照）
テングサと寒天：重要な輸出産業として多くの研究 野村豊など ※フノリ（伊藤春恵）
日本と朝鮮（さらに東アジア）の海藻を通じた比較史・関係史の可能性
 - 移動する採り手（とくに海女）への注目 塚本明・伊地知紀子・李善愛など
 - 商品への注目 石川亮太など自然環境や生活文化の異同を踏まえたより多面的な検討が課題
※国立歴史民俗博物館・韓国国立民俗博物館の国際共同企画展示「昆布とミヨク（わかめ）」

1 近代朝鮮の採藻業——日本との比較

- ・植民地期の漁獲高統計 日本と比べ海藻の比重が大きく高いわけではない（資料 2・3）
民族別に見た漁獲高 朝鮮人漁業者にとっての海藻の重要性 ※最高値 17.1%（1914）
背景：動力船をはじめ資本を要する漁法は日本人漁業者が優位にあったこと
朝鮮人漁業者による在来の磯漁が根強く続いていたこと
- ・海藻漁獲高の内訳
朝鮮：テングサ・フノリ・ワカメ・ノリ（アマノリ） ※1924～養殖ノリの除外？
日本：コンブ・ワカメ・テングサ・フノリ
⇒ おおむね類似品目で構成されるが重みが違う 分布・消費・商品性…

2 近代日本の海藻利用と朝鮮半島——テングサとフノリ

(1) テングサ

- ・テングサ：寒天の原料となる紅藻類の総称 マクサ・ヒラクサ・オニクサ etc.
干潮線の直下～水深 30 メートルまで（透明度による）
潜り漁の対象となるほか、海岸の寄り草や船上から器具をもちいた採取（マンガ等）

- ・テングサ利用の変遷

トコロテン 寒天 17世紀に製法発明→摂津・丹波の農家副業

大阪の間屋を中心とした原藻と製品の流通

1750年頃、長崎を通じた対中国輸出の開始 →19世紀には輸出生産の方が大
開港後の輸出拡大、相手地域の広がり（ヨーロッパ・アメリカにも）（資料4）

食用以外の工業用・医薬用としての利用、ゼラチンの代替品

生産地域、関西（京都・大阪・兵庫）に加え長野や岐阜にも拡大

- ・原藻産地としての朝鮮

遅くとも幕末期には朝鮮原藻の利用が確認される

1890年頃から朝鮮産テングサの利用が本格化（資料5）

多様な原藻を混和して品質を調整する寒天製法の特徴

（2）フノリ

- ・フノリ属の紅藻類 マフノリ・フクロフノリ・ハナフノリ

潮間帯に生育 手で「むしる」

食用+糊料（糊付け・防湿・にじみ防止・艶出し・固める・汚れ落とし）

天日干しによる板フノリ（漉きフノリ）の生産

- ・フノリ利用の変遷

17世紀 都市化+農村工業の発展 →フノリの使用拡大 織物用+建材用（しっくい）

大阪布海苔仲間問屋による集散、近隣農家による板フノリの下請け生産

近代にも需要拡大 輸出羽二重（福井）はじめ在来産業の拡大

和装の減少や化学糊料の普及による衰退

- ・原藻産地としての朝鮮

大阪への輸入 五島産など高級品の代替品 1890年代から拡大

織物業の成長に伴い大阪のほか福井や九州などでも消費拡大

3 朝鮮半島での生産・利用と対日輸出

- ・伝統的な生産と利用

フノリ：「細毛」、「加土里（加沙里）」 テングサ：「牛毛」

いずれも南海岸～東海岸に広く分布・利用されていた 『新增東国輿地勝覧』（16世紀）

フノリは沿岸海村の共有資源／テングサは海女漁の対象（済州島、他は不明）

いずれも食用 李圭景『五洲衍文長箋散稿』（19世紀初）など

糊料としての利用有無は不明 *済州島民俗調査（1980年代）—衣服糊付け

・近世の対日輸出

草梁倭館（釜山、1678 - 1876）対馬藩士・商人が駐在、外交交渉と貿易
17世紀末～ 「於胡」（オゴノリ or マフノリ）、「牛毛」（テングサ）の輸出記事
濟州島や全羅道（半島南西部）から倭館にフノリ・テングサが持ち込まれる
丁若銓『茲山魚譜』（1814年） 日本で織物の糊料に用いることを指摘

・開港後の対日輸出

1876 日朝修好条規 旧倭館を日本人居留地として貿易・居住を認める
開港前後の日朝貿易 開港以前からの連続性 フノリ・テングサ（資料6）
対馬商人によるフノリの大阪への輸出 福田増兵衛・大池忠助など
朝鮮国内における買い付け活動の展開
植民地期（1910～45） 輸移出税撤廃（1912）、海藻検査規則（1913）
日本の市場状況に敏感に反応

・明らかでない採取実態

日本人漁民の朝鮮出漁は 1880年代から開始—当初は海藻を対象としない？
日清戦争（1894-95）～ 志摩海女の出漁・テングサ採取 濟州島海女との競合
フノリの採取形態については明らかでない

おわりに

近世以来の日朝間の海藻を通じた交流
近代日本の経済成長（工業化・都市化・輸出の拡大）→海藻需要も拡大
朝鮮産地の役割の大きさ フノリ・テングサ 他の例：アマノリ（味付け海苔）
課題：朝鮮産地の現場とその変化 慣行／市場／植民権力

文献リスト

（日本語）

- 荒居英次（1975）『近世海産物貿易史の研究』吉川弘文館。
李善愛（2001）『海を越える濟州島の海女：海の資源をめぐる女のたたかい』明石書店。
石川亮太（2021）「交隣と貿易：開港前後の海藻輸出」岡本隆司（編）『交隣と東アジア：近世から近代へ』名古屋大学出版会。
伊地知紀子（2012）「帝国日本と濟州島チャムス〔海女〕の出稼ぎ」『日本学』34号，韓国：東国大学校日本学研究所。
伊藤春恵（1995）「伊勢ふのり：三重県のフノリ加工」『海と人間』23号。
小川国治（1973）『江戸幕府輸出海産物の研究』吉川弘文館。
塚本明（2019）『鳥羽・志摩の海女：素潜り漁の歴史と現在』吉川弘文館。

野村豊（1951）『寒天の歴史地理学研究』大阪府経済部水産課.

林金雄・岡崎彰夫（1970）『寒天ハンドブック』光琳書院.

（韓国語）

金東哲（1993）『『東萊府商賈案』을 통해서 본 19世紀 後半의 東萊商人』『韓日關係史研究』創刊号, 韓国：韓日關係史学会.

鄭成一（2013）「1872 - 75年 朝・日貿易統計」『韓日關係史研究』46号, 同上.

資料1 テングサ・フノリの分布

		フクロフノリ (<i>Gloiopeltis furcata</i>)	マフノリ (<i>G. tenax</i>)	マクサ (<i>Gelidium amansii</i>)
紅海				
インド洋				
アフリカ				
地中海・アドリア海				
太平洋	ポリネシア			○
	マレー半島			○
	台湾	○		○
	沖縄	○	○	○
朝鮮	東海岸北部	○		○
	東海岸南部	○	○	○
	南海岸	○	○	○
	濟州島	○	○	○
	西海岸	○	○	○
日本	南海岸	○	○	○
	太平洋岸中部	○	○	○
	太平洋岸北部	○		○
	日本海岸	○	○	○
	北海道	○		○
サハリン				
千島列島				
ベーリング海				
アメリカ				
豪州・NZ				
大西洋	アメリカ			○
	ヨーロッパ			○

出所) Jae Won Kang (姜悌源), “On the Geographical Distribution of Marine Algae in Korea”, *Bulletin of Pusan Fisheries College* (釜山水産大学研究報告), 7 (1, 2), 1966. 地名・学名の日本語訳は発表者(石川)による。

資料2
日本・朝鮮の漁獲高比較

	日本			朝鮮		
	沿岸漁獲高	うち海藻	比率(%)	漁獲高	うち海藻	比率(%)
1905～11年	64,347	2,858	4.44	n/a	n/a	n/a
1912～19年	121,282	6,852	5.65	19,801	1,358	6.86
1920～29年	235,862	11,950	5.07	53,634	3,424	6.38
1930～38年	184,802	10,531	5.70	63,883	2,589	4.05

* 当該期間の単純平均、単位1,000円

日本：1905～29年『農林省累年統計表：明治六年乃至昭和四年』（農林省大臣官房統計課、1932年）、1930～38年『農林省統計表』各年から、「漁獲高」（1926年以後「沿岸漁獲高」）の数値。沖合・遠洋漁業、養殖業の数値を含まない。

朝鮮：『朝鮮総督府統計年報』（朝鮮総督府、各年）から「漁獲高」の数値。集計の基準については確認未済。

資料3

朝鮮における漁獲高、「内地人」「朝鮮人」比較

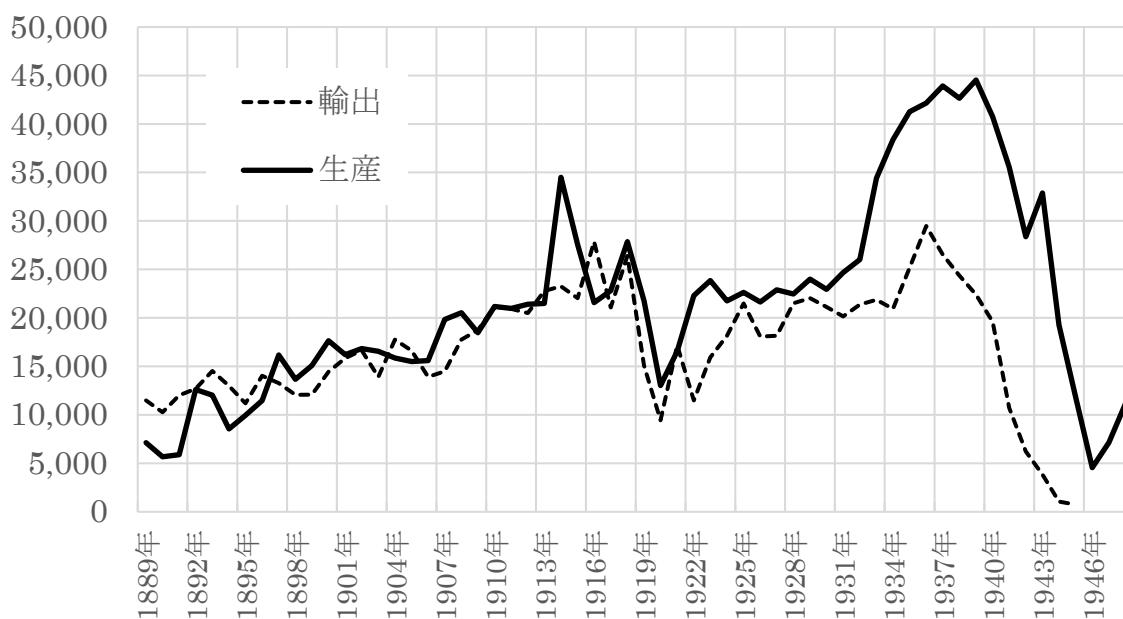
	「内地人」			「朝鮮人」		
	漁獲高	うち海藻	比率(%)	漁獲高	うち海藻	比率(%)
1912～19年	10,386	26	0.25	9,416	1,339	14.22
1920～29年	27,018	50	0.18	26,616	3,385	12.72
1930～32年	21,931	50	0.23	25,726	2,441	9.49

* 当該期間の単純平均、単位1,000円

* 『朝鮮総督府統計年報』では民族別漁獲高が1932年までしか掲載されていない。

* 「内地人」の分には非居住者の漁獲高（いわゆる「朝鮮出漁」）を含むと見られる。

資料4 日本での寒天生産と輸出（単位：担、1889～1948年）



資料5

大阪府豊能郡の寒天原藻利用高（1904年）

伊豆（静岡県）	32,626 貫
紀州（和歌山県）	26,275 貫
韓国	21,400 貫
台湾	13,350 貫
房州（千葉県）	13,030 貫
日向（宮崎県）	7,500 貫
土佐（高知県）	7,380 貫
志摩（三重県）	6,600 貫
北海道	5,320 貫
支那	5,000 貫
佐渡（新潟県）	1,200 貫
合計	139,681 貫

出所：農商務省水産局『水産貿易要覧』上、1909、128頁。

資料6

朝鮮(釜山)からの輸出商品(1878年、円)

分類	品名	金額	分類計	(%)	
穀物	米、豆類、小麦など		76,242	42	
畜産物	牛皮、牛骨、毛皮など		55,934	31	
繊維品	絹布、真綿など		18,952	10	
薬材	黄芩、人蔘、五倍子など		6,551	4	
鉱産物	諸金属類、黒鉛		6,082	3	
海産物	海參	Irico or Beche de Mer	6,426	16,775	9
	海羅	Funori	4,446		
	寒天草	Kantenso	3,353		
	鱧鱈	Shark's Fins	1,752		
	乾鰯(肥料)	Dried Sardine, for manure	252		
	諸乾魚乾貝類	Dried Fish & Shell-fish, Unenum	213		
	鯨骨	Bone, Whale	180		
	鮑	Dried Awabi	137		
	鮑殻	Shells, Awabi	15		
その他	諸雑貨類	Miscellaneous	934	934	1
合計			181,469	100	

出所：「朝鮮旧貿易 自明治十年至同十七年 八箇年対照表」(大蔵省関税局『大日本外国貿易 自明治元年至同十八年 十八箇年対照表』1886年、附録)